

伸びる人

2024.7.1

プロ野球、ソフトバンクホークスの小久保裕紀監督の話である。小久保監督は、福岡ダイエーホークスに入団した時の24歳のとき、試合前のランニングで一緒になった22歳のイチロー選手が放った言葉が、野球人生を支える一つのテーマをくれたという。

それは、1996年のオールスターゲームのことだった。小久保選手は、1994年に青山学院大学から福岡ダイエーホークスに入団した。2年目で本塁打王を獲得したものの「俺はパ・リーグで一番だ」と天狗になってしまい、翌シーズンは開幕から全く打てず、焦りは募るばかりだった。

一方、イチロー選手は高卒でオリックス・ブルーウェーブに入団し、3年目の1994年に初めて最多安打と首位打者に輝くと、翌シーズンはその2つのタイトルに加えて打点王を獲得した。1996年も3年連続の首位打者へと邁進中だった。

そういう状況で迎えたオールスターの試合前、小久保選手は、イチロー選手と2人で外野をランニングしながら、「モチベーションって下がらないの？」と尋ねた。「小久保さんは数字を残すためだけに野球をやっているんですか？」「まあ残さないとレギュラーを奪われるし・・・」

すると、イチロー選手は小久保選手の目を見つめながらこう言った。「僕は心の中に磨き上げた“石”がある。それを野球を通じて輝かせたい」衝撃だった。それまでは成績を残す、得点を稼ぐ、有名になることばかりを考えていたのだが、この日を境に、野球の練習をしているだけではダメ、自分をもっと高めなければいけないと思ひ至る。

心がけたのは、一人の時間の使い方である。空いている時間は読書をする決まり、毎日実践した。野球を通して人間力を鍛えるというスイッチが入ったのは、イチロー選手の言葉があったからこそである。後年、「あのときの言葉のおかげで俺の野球人生がある」と感謝の言葉を何度伝えたかわからない。

たとえイチロー選手の言葉と出会ったとしても、誰もが小久保選手のようになるわけではないだろう。一流選手同士だからこそ、通じ合うものがあつたのだと思う。一流になればなるほど、人間性、人間力を鍛えることになる。その一つの方法が読書である。

子どもたちの前に立つ学校の教員は、プロスポーツ選手に負けないくらい人間力を身につける必要があるだろう。果たして、それだけの読書量を確保しているだろうか。小久保監督は、こうも言っている。「若いときの苦労は買ってでもしなさいとよく言われるが、若いときしかクリアできないチャレンジというものがある。そこから遠ざかったり逃げたりすると、必ず後々ツケが回ってくる」

伸びる人とは、どういった人だろうか。特に、20代をはじめ若い方々には、自分の人生をどう生きるかということを考え抜いてもらい、人間性を磨き、人間力をつけ、どんどん伸びてほしい。私も、まだまだ伸びるつもりである。